

西宮市・技術職員研修
「阪神大震災 ー記録を辿ってー」(資料集)

目次

別紙1 「カメラマン20人の証言」より抜粋	1頁
別紙2 「50人に聞く 私はこうして逃げた、助かった」より抜粋	6頁
別紙3 密着 西宮市分銅町1月26日	12頁
別紙4 ボランティアは何をしたか、何をすべきか	14頁
別紙5 避難所ケアの西宮モデルを	17頁
別紙6 大震災の教訓と対応策、並びに評価と改善策	18頁
参考文献・資料	25頁

別紙 1

資料：朝日新聞社：レンズが泣いた関西大震災写真記録、AERA、1995年2月25日
「カメラマン20人の証言」より抜粋

「1月17日、薄明の阪神地方を襲った激しい揺れ。空前の大惨事に直面したカメラマンは何を考え、どう動いたか」。

○副編集長 小島章夫

マスコミは数字が大好きです。「死者五千二百人」「倒壊家屋十万户」「三十万人が避難所に」 たしかに、こうしたデータによって被害の凄まじさ、「規模」を知ることができます。しかし、とらわれすぎると、数字だけで今回の大震災が分かったような気持ちになって、この大惨事に翻弄された一人一人の「人間」が見えにくくなってしまいうような気がするのです。

一回きりの人生を、理不尽な力によって無理やり終わらされた死者たちの無念の叫び。生き残ったものの、突然家族や恋人と引き裂かれた人々の痛憤。築き上げてきた一切を失った被災者のあまりにも困難な未来。 そうした無数の悲劇のひとつひとつを忘れないために、さらには残された人々の手厳しい現実、一人でも多くの人々が、心の底から思いを寄せ続けることができるように、そう念じてこの写真記録をつくりました。犠牲者の方々のご冥福を改めてお祈りしたいと思います。この種の報道のあり方をめぐって、マスコミはしばしば批判されてきました。今回も例外ではありません。撮影してきたカメラマンはどんな思いだったのか。「二十人の証言」を通して、実像の一端を知っていただければ幸いに存じます。

○立花 嘉乃記者(27)

十七日朝は泊まり明けで、東京本社にいた。すぐ大阪へ向かうよう指示を受け、羽田から社機で伊丹空港に午前十時ごろ着いた。空港からタクシーで神戸方面に向かう。午後三時半ごろ、二階建ての木造アパートが倒壊した現場に行きあたった。一階に住んでいた二十二歳の男性が下敷きになった、という。自衛隊員らが懸命に救出にあたっていた。やがて恋人と思われる女性が駆けつけた。二十歳ぐらいだった。アパートの前に立ちつくして、祈るように両手を組んでいる。写真部に来てまだ四年目、経験が浅い。こんな場面では、どの程度踏み込んで撮ったらいいのか判断がつかない。一時間か一時間半くらいたったろうか、「だめだった」という知らせがもたらされた。女性は、無残な死をとげた恋人の男友だちに抱きかかえられながら、泣きくずれた。もし、自分の愛する男性が目の前で死んでしまったら。そう思うと、涙があふれて仕方がなかった。涙をぬぐいながら、それでも後方から何枚かシャッターを切った。「こんなに汚れて。きれいにしななきゃね」母親は、そういいながら、変わり果てたわが子のほおをなでる。最愛の人を失った女性は、亡きがらにとりすがって泣きじゃくっていた。年齢が近いわたしには、他人事とは思えなかった。もう一步、踏み込んで撮るべきだったのかもしれないが、とてもできなかった。

○山本 正彦記者 (37) の証言

午前六時十分ごろ、電話でたたき起こされた。西宮市の実家にいる父親からだった。パニックに陥っているようで、初めは母親が死んだのかと思った。「家の前の(饅頭屋の)成田屋がつぶれたんや」テレビをつけてみた。地震のニュースが続いている。しかし、西宮の話は出てこない。しばらくして、東京本社写真部から電話が入った。ちょうど、この日から東北に出張する予定だったので、「出張セット」はひとそろい整えていた。

同僚二人と社機で伊丹空港へ飛んだ。正午すぎに空港を車で発ち、西宮市に向かった。車のラジオは、西宮で三百人が生き埋めになった、と伝えていた。武庫川を越えたあたりで、父親が電話でしゃべっていたことがやっと理解できた。初めに出くわしたのは、西宮市門前町のアパート倒壊現場だ。二世帯が入居していた木造二階建ての一階部分がつぶれ、ぺちゃんこになっている。自衛隊員らが、遺体を運び出そうとしていた。

カメラを構えていると、後ろから声をかけられた。二十八、九歳の男性だった。「申し訳ないけど、撮らないでください」髪の毛は茶色、セーターにジーパン。元暴走族ふうに見えなくもなかったが、ことば遣いは丁寧で、落ち着いた口調だった。私は撮るのをやめた。あとでわかったのだが、亡くなったのは奥さんだった。これまでに、さまざまな事件、事故取材してきた。が、今回は何か異次元というか、別世界に紛れ込んだような感じだった。

○石川 重弘記者 (42)

十八日早朝、歩いて西宮市北口町の家屋倒壊現場に向かった。途中、民家が焼け落ちた一角を通った。四～五人の男女がしゃがみ込んで何か掘っている。そばに警察官が立っていた。なにげなくカメラを構えた瞬間、鋭い声が飛んできた。「やめてください」肉親の遺骨を拾っていたのだ。シャッターを切れなかった。

めざす現場は、阪急西宮北口駅のすぐそば。住宅がつぶれ、一人が生き埋めになっている。呼びかけても、応答が全くないらしい。家族の見守る前で、捜索活動が続く。やはり倒壊した隣の家の屋根の上で、遺体の搬出される瞬間を待った。自分はハゲタカだ。いや、地震の惨状はだれかが記録し、伝えなければならぬ。二つの思いが心の中をかけめぐる。

「落とすなよ」「しっかり持て」ひしやげた窓から、毛布にくるまれた遺体が運び出されると、さっきの葛藤はどっかに吹っ飛んだ。夢中でファインダーをのぞく。毛布のはしから、白髪がちらりと見えた。

「もう十分でしょ」息子と思われる男性に丁寧な口調で制止された。でも、次のカメラアングルを思い描いてしまう。両側の家がつぶれた路地から出てくる場面を撮らなければ。先回りして、遠くから、また撮影した。自衛隊員に守られながら遠ざかっていく亡きがらに、思わず手をあわせた。もし逆の立場だったら、どうだろう。「やめろっ」と怒鳴りつけていたにちがいない。

○松本 敏弘記者 (40)

海外の取材では、何度も血なまぐさい現場を撮影してきた。アキノ氏の血が染み込んだマニラ空港の滑走路。ネグロス島の飢餓で骨と皮ばかりになって死んでいった子供たち。タイ国軍に撃たれ、私のすぐ横で脳しょうを飛び散らせて死んでいった学生……。こうし

た政変や暴動などには予感があり、予兆もある。

しかし、ごく平和に暮らしていた普通の市民を、突然、これほど大量に襲った“死”を目撃するのは初めてだった。東灘区深江本町で、今度の取材では初めて遺体と対面した。十歳と八歳の兄妹だった。兄の顔にはかすり傷のようなものがある。が、苦しんだ様子はない。妹の顔には傷一つなく、まるで眠っているかのようにだった。恐らく倒壊した家の下敷きになったのだろう。やがて父親が運ばれてきた。やはり遺体だった。

集会所の一室に大、中、小、と三枚の布団が順に並べられ、近所のおばさんが「せめて並べて置いてやらんと」と泣きながら子供たちの顔をさすった。母親は重体で病院に運ばれたという。“死”には慣れていたはずだったが足が震え、少ししてから涙が出てきた。とにかく撮らなければ、記録として残しておかなければ。泣き続ける近所の人たちに。「お願いします。記録しておきたいんです。記録しなきゃならないんです」そう頼んで、シャッターを押させていただいた。とにかく記録して残さなければ、という説明しがたい思いが自分を突き動かしていた。三人の遺体に手を合わせた。ごめんなさい、と口の中でつぶやいた。

○山谷 勉記者(36)

チャーターヘリで名古屋から伊丹空港に飛び、十七日午後四時すぎ、阪神支局に着いた。一時間で戻ってこい、といわれて、後ろのタイヤの空気が半分ぬけた自転車を借り、煙の上がっている方向をめざして、ペダルを漕いだ。JRの列車が脱線し、阪急夙川駅前では、五階建てのマンションが倒壊していた。だが、震災のすごさが肌でわかったのは、翌日だった。

早朝、東灘区の東灘小学校に出かけた。着の身着のまま逃げてきた住民たちが、土のグラウンドにびっしり毛布をかぶってうずくまっていた。ぎょっとした。全部で二千人くらいいる、という。みんな眠っていない様子だった。あちこちでたき火をして、寒さをしのいでいる。駐車していた車のガラスには霜が降りていた。付近を歩いてみた。なんでこんなに住宅がつぶれているんだ。まるで屋根の上をブルドーザーが走って、おしつぶしたかのようだ。電柱が二百米にわたって軒並み倒れている。これは日本ではない。そう思った。

被災した人びとは冷静だ、と報じられていたが、どこか違うように思えてならない。肉親が死んでも助け出せない、そんな中で耐えていた人たちだ。地震の直後から、大勢の記者、カメラマンが報道を続けているが、あの被害をどれだけ記録できたのか。よくわからない。(以下、省略)

○花井 崇記者(37)の証言

いきなり頭に何か落ちてきた。部屋全体がドシヤッ、ドシヤッと不気味な音を立てて揺れている。トランポリンのようにベッドの上で体がはね上がった。真っ暗だ。頭を直撃したのは、棚の上のスピーカーらしい。揺れがおさまっても、しばらく布団の中でぼうっとしていた。気がつくと、顔がぬるぬるする。かなり出血しているようだ。痛みは感じなかった。まずメガネを手探りし、それからタオルをさがしあてて、止血のため額にぎりぎり巻きつけた。

住まいは芦屋市の山手のマンションの五階。ふだんなら窓から神戸の夜景が一望できる。だが、停電しているのだろう、外は闇で、芦屋から右手の神戸方面にかけて火柱が五本ほど上がっていた。「こりゃ大変だ」 階下には写真部の同僚、荒井聡記者が住んでいる。心配してくれていた。電話は全く通じない。午前六時すぎ、エレベーターは動かないので二人で階段をおり、浜をめざして歩き出した。

「ジーッ」、「リリリーッ」。 けたたましい音が闇を裂いて響き、背筋が寒くなった。あちこちのビルの報知器が鳴りつづけていたのだ。JRの線路を越えたあたりから、電柱がばたばた倒れ、文化住宅がいたるところでぺちゃんこになっていた。一階がつぶれ辛うじて残った二階部分からはい出してきた若夫婦が呆然と立ちつくしている。両親が下敷きになっているのだという。「写真よりまず助けなくては」。カメラはわきに置き、「大丈夫ですか」とドンドン叩いて応答があった家から救出にかかった。近所の人が見つけてきたノコギリやスコップで畳を切り、壁土をどける。荒井記者や、彼とはぐれた後は近くの住民と協力して全部で十人くらい助けた。何十分もかけて瓦礫の山と格闘し、助け出しては写真をとる、その繰り返し。ファインダーをのぞく目が血で曇って、手でぬぐいながら撮影した。(以下、省略)

○荒井 聡記者 (30) の証言

ベッドで揺れが収まるのをひたすら待った。電話機は床に落ちて粉々に砕けた。芦屋市三条町のマンションの二階が住まい。上には、同僚の花井崇記者がいる。素足に靴をはき、カメラ、レンズなど道具一式を入れたバッグをひつつかんで階段を上った。ノックすると、頭から血を流した花井記者が出てきた。だいぶ出血していたが、どうやら大丈夫のようだ。

外には、助かった住民たちが出てきていて、パニック状態だった。国道2号の方へ、火の手を目標に二人で歩き出した。木造の家屋があちこちで倒れているのに、救急車も消防車もパトカーも来ていない。つぶれた家の下敷きになっている人がいるのに、救助にあたる人間がない。自分たちがやるしかなかった。首からカメラをさげたまま、廃材の山に登り、一人が助けている間、もう一人が取材することにした。一台のカメラを交代で使うこともあった。そのうち、近所の人やスコップを持ってきてくれた。どの柱、どの梁から切ったらいいのか見当がつかない。大工さんらしい年配の男性が、たまたま近くにいて指南してくれた。プロの経験と知恵はありがたかった。そうでなければ、二～三倍の時間がかかっただろう。柱や壁土に首まで埋まって助けを求める女性もいた。でも、カメラは向けられなかった。必死になって救出作業をしているうちに、花井記者とは、はぐれてしまった。いったん自宅に戻って車をひっぱり出し、大阪へ向かった。(以下、省略)

○後藤 正記者 (50) の証言

大きな揺れを感じて、すぐに目が覚めた。窓ガラスか食器か、とにかくガラスのようなものが砕け散る激しい音が続く。どうやら台所で食器棚が倒れたらしい。自宅は、六甲アイランドの高層マンションの八階にある。しばらくして大学四回生の長女が、「大丈夫？」と声をかけてきた。大学二回生の次女も無事だった。いつもカメラバッグに入れていた懐中電灯をひっぱり出してスイッチを入れると、室内は足の踏み場もない。足元を照らしな

がら玄関まで歩き、靴をはいた。

「子どもと女房が出てこられん。助けて」。隣に住む一家の主が救助を求めてきた。靴のまま上がり込んで中をのぞくと、夫人と女兒がタンスか何かの下敷きになっている。倒れた家具にじゃまされて寢室のドアが開かない。いったん自宅に戻って扉を破る道具をさがしているうち、電話が鳴った。大阪本社で泊まり勤務についていた写真部の朝日教之記者からだ。 「ひどい地震があったらしい。すぐに支局に行ってほしい」 隣家に引き返したときは、二人ともすでに助け出されていた。女の子は泣きじゃくっていたが無事、夫人も軽傷だった。着替えをすませてから、車で出かける前に、隣の家の中を撮らせてほしい、と頼んだ。さっきまで二人が閉じ込められていた真っ暗な室内を撮影した。

六甲アイランドと神戸をつなぐ六甲大橋は、橋げたのつなぎ目の部分に、ところどころ五～六センチの段差ができています。市街地から立ちのぼる黒い煙が七、八本見えた。神戸支局のある三宮方面をめざし、灘大橋にさしかかった。手前で高架道路のつなぎ目がはずれ、五十センチくらいずれている。向こうから乗用車がやってきた。そっちはどう？ 「摩耶では橋が落ちてるよ」 やむなくUターンして一般道路に下りた。神戸市東灘区住吉浜町あたりでは、液状化現象がおきたのか、道路は水びたしだった。隆起した路面で車体の底を何度もこすった。国道43号の上を走る阪神高速の橋脚は軒並み座屈して、はじけていた。灘付近では酒蔵が倒れ、民家が炎上し、路面に何本も亀裂が走る。途中、毛布をかぶった子連れの夫婦が、道端で手をあげるのが目に入った。山側から逃げてきたのだという。

「町内がメチャクチャにやられて、みんな下敷きになってしもた。三宮まで乗せてくれへんやろか」 三宮駅の周辺は、神戸新聞会館やそごうなどがつぶれ、いたるところでビルが傾いていた。(以下、省略)

○佐藤 泰也記者(59)

地震の直前に目がさめた。山鳴りが聞こえたからだ。自宅は灘区鶴甲の高台にある。ドーンという音とともに、上下動に揺さぶられた。柱がミシミシ、ベキベキと鳴った。しかし、家が、固い岩盤の上にたっていたせいか、食器棚などは倒れなかった。懐中電灯をさがして、ラジオをつけた。このころはまだ、大したことはないな、という感じだった。

午前七時前にカメラとフィルムを持って家を出た。なぜか空が、黒い不気味な色に変わっている。神戸大学のところまで下り浜側を見下ろして、それが煙だとわかった。相当な被害が出ていることが、初めて実感できた。JR六甲道駅の北側、六甲町あたりは悲惨だった。あちこちで民家が全壊し、火災が起き、がれきの山の間で、着の身着のままの人々がうずくまっている。

大阪本社へ行くのは、どう考えても無理だったので、三宮の神戸支局に向かうことに決めた。歩いていくしかない、と半ばあきらめていたが、運よくタクシーが通りかかった。三宮の状況もひどかった。支局のあるビルは、エレベーターが動いていないので、真っ暗な非常階段を上った。すでに何人かの支局員が電話にかじりついていた。これまでいろんな事件、事故を取材したが、こんなひどい災害は初めての経験だ。兵庫県内在住の写真部員六人のうち、自宅に戻って生活できているのは、二月に入ってもまだ私だけだ。

別紙 2

資料：朝日新聞社：関西大震災に学ぶ、AERA、1995年2月5日

「50人に聞く 私はこうして逃げた、助かった」より抜粋

「誰もが生まれて初めて経験する、震度7の激震が薄明の街を襲った。1月17日午前5時46分。そのとき人々はどう逃げ、助かったか。死者5千人、避難民30万人という戦後最大の惨事を体験して、いま何を考えているか。」

○西宮市 小学校教頭 山口喜三郎さん (48)

勤務先の西宮市立甲東小学校は避難所になっています。五日目になっても、出勤できる教職員は十数人。家をなくし、校内ですごしている千三百人ほどの人たちへの対応や連絡調整に追われています。避難者の人数も正確にわからないので、いま学校のコンピューターを使って被災者名簿を作っているところです。

怖いのはデマです。最初 「とりあえず二十日まで休校し、あとは状況を見て判断する」と決めたら、「二十一日には全員登校せよ」「学校が始まるから、避難者は追い出される」と、話がどんどん歪んで伝わり、あるお年寄りも 「私らは行くところがないんです」と悲愴な顔で職員室にやってきました。「ここで仮設住宅の申し込みを先着順で受けつけていると聞いた」と駆け込んでくる人もいます。

初日には食料の配給がなく、二日目は食パンが一人一枚。三日目はおにぎりが毎食一個でした。数が足りない時は、もらえなかった人に整理券を発行し、次の物資を優先的に配るといった工夫をしました。ただ、「次はいつ届くのか」と聞かれ、われわれもわからないので困りましたが。

食べ物が足りてくると、次はトイレの水が問題になりました。プールの水を運んで流していますが、通常1mほどの水深が、五日目には30cmぐらいにまで減りました。果たしていつまでもつことか。

ここでの暮らしが長くなり、みんな情報に飢えています。新聞販売店が何十部、何百部とまとめて届けてくれる紙面を、取り合って読んでいます。ちょっとしたデマや不公平も、問題を引き起こしかねない。一番、気を遣っている点です。

学校では、体育館の屋根が落ちました。また、四年生の女の子が一人、柱の下敷きになって亡くなりました。授業は早く再開したいけれど、県外の親類宅へ避難する子も出てきている。いったい何人そろろうか、まだわかりません。

○西宮市 西宮市立中央公民館長 西村 治さん (50)

地震があつてすぐ、パジャマに上をはおって、バイクで公民館まで様子を見に行きました。駅にして一区間の近い所ですが、いつもの道は通れなくて、二十五分ぐらいかかりました。

公民館はガラスが割れ、中はひっくり返っていたが、建物そのものは大丈夫だったので、一度家に戻って着替えてきました。それからずっと、着替えに帰るほかは公民館にいます。家もダンスや衣類が倒れてがちゃがちゃでしたが、それが公務員かなあ、という気がする。家の方は、家内と子供たちが寝る部屋だけはかたづけました。

公民館でまずやったのは避難所の開設。初日は百人ぐらいだったでしょうか。洋室には敷物を敷きましたが、そこに電気カーペットを持ち込んだ人もいて。今は救援物資の水が入るようになりましたが、最初の二日間はタンクの貯水分で乗り切ることができました。

トイレの水は、バケツにロープをつけて、すぐ隣の川から水を汲み上げたり、学校のプールへプラスチックのタンクを持って汲みに行った。避難している人も手伝ってくれました。食器を洗った水もとつておいて使っています。ここは人通りが多いので、トイレの利用は多いんですが、中にはきちんとしてくれない人もいて、半日に一回は掃除しています。

日常生活とあまりにかけ離れた非常事態で、最初は飲み水、それが足りると食べ物、その次は食べ物の質が求められるようになりますが、問題は住むところ。大阪へ行ってアパートを探したけれど見つからない人がいたり、そういう心配がある。

公民館は生涯学習の中心施設といわれているが、地震で亀裂ができたり、ひび割れたところが多い。補修費用を市が賄うと財政負担が大きくなる。生活基盤の復旧が先、というのわかるが、施設をあずかる者としては援助をお願いしたい。

○西宮市 会社員 原田真治さん (39)

一番大事なのは懐中電灯と痛感した。まず縦揺れが二十秒ほど続き、それから四十秒ほど横揺れになった。すぐに停電になったが、子供がオモチャにしていた懐中電灯を取り出し、三人の子供にも服を着せて十分ほどして団地の外に出ました。周囲が広いので、建物が倒壊しても大丈夫と判断したからです。

すぐに車に入り、ラジオでNHKニュースを聞きました。明るくなってから団地の周囲を点検し、建物や道路に被害が少ないのでまた家に入りました。団地は築三十年。引っ越してから十年くらいになりますが、これまでは地震が一、二度あったきりです。身内が心配していると思い、連絡しようとしたが、電話がまったく通じない。学校にも連絡ができず、休校かどうかも分からなかった。一度だけ電話がかかってきたが、かけることはできません。仕事関係の人と少し外を見て回り、これは甚大な被害だと知りました。うちは五階建ての三階ですが、棚の本や荷物はみんな落ちてきた。食器棚は引き戸だったので無事でしたが、開き戸の家は食器がみんな割れたようです。

朝のうちは水が出たが、間もなく断水になった。準備のいい人は、水があるうちに洗濯や貯水をしておいたそうです。浜甲子園中学校で給水を待ちましたが、いつ給水車が来るかまったく分からない。整理券が五百人以上になったようです。船やヨット、ボートのメンテナンスの仕事をしていますから、緊急事態には強い方でしょう。

痛感したのは、懐中電灯の大切さ。子供に着替えさせるにせよ、手元が明るいかどうかで安心感がまったく違う。いちばん大事な道具です。それから、地震の後で一般の人が車で出歩くと救援の邪魔になる。控えた方がいいでしょう。

○西宮市 内科医 藤原佳典さん (32)

地震当日の朝、阪神電鉄が不通になったため、タクシーを飛ばして勤務先の県立尼崎病院に駆けつけました。医療機器が倒れてましたが、病院そのものの被害は軽かった。それより困ったのは、指揮系統が混乱したことです。職員のうち、出勤できたのは半分くらい。病院幹部は芦屋とか遠くに住んでいる人が多く、連絡が取れない。十八日朝まで、誰が出

勤できたのかの点検もなかった。けが人が運ばれてくると考えて待機していたが、十七、十八日は全くの肩すかし。「淡路島に救援に行く」とか、「救急患者が向かっているらしい」とか、デマだけは流れてきました。

私のような末端の若い医師は、てっきり現場へ救援に行くものだと思っていたのに、何をしていいのかわからない。職場を放棄して一人で駆けつけるわけにもいかないし、行こうにも道路は渋滞で大混乱。どうしてヘリで近隣地区の医師を送り込まないのか、不思議ですね。

こういう時、薬なしで医者だけで現場へ駆けつけても仕方がないですよ。薬を提供してくれる製薬会社があるといいんですが。やがて医薬品が被害のひどい地域に優先的に回され始め、しばらく病院は開店休業状態。テレビで被害の様子を見て「ひどいなあ」と騒いでいるような状態で、はがゆかったですね。自宅の近くで瓦礫を掘り起こして人助けしているおじさんの方が偉いじゃないか、なんて考えたり。

救援ボランティアに参加しようとした若い医師もいましたが、いつも電話が話し中で、しらけてしまった。けが人や人工透析の患者さんが神戸から入ってきて忙しくなり始めたのは、二十日ごろですね。私も「関西に地震はない」と幼少のころから信じ込んできましたから、こういう非常時の医療機関や職員の間連絡や指揮系統は用意がなかった、というのが正直なところじゃないでしょうか。

○西宮市 近畿日本鉄道相談役 上山善紀さん (80)

5年前に新築した家ですが、完全につぶれると思いましたがね。とにかく激しい揺れで歩けない。戸棚の瀬戸物は全部投げ出されるし、ピアノは倒れる。二階の物置の戸は開かなくなっていた。幸い、戸棚は備え付けだったから、倒れることはありませんでしたが……。しばらくして外へ出てみると古い家はみな押しつぶされていましたね。

西宮の次男の嫁の実家はつぶれて、母親が生き埋めになった。十二時間後に無事助け出されたようですが……。地震直後は電話が通じず、心配しました。夫婦二人暮らしですから、心細いものです。夜も眠れませんでした。電気と水道はだいじょうぶですが、ガスが止まったまま。

正月にロスにいる長男を訪ねたら、七十年ぶりという大暴風雨で外に出られなかった。七日に帰国して十日後にこの大地震ですからね……。ロスでもこの地震を大きく報道しているらしく、当日の夜には次男から安否を確かめる国際電話がかかってきました。

これまで日本の震災対策は東海地方に偏りすぎたのではないですか。今回の被害も、一種の一極集中の弊害が出たといえるのかもしれない。国の対策は全国くまなくやってもらわないと困ります。都心の再開発を急に進めるのも考えものですな。神戸市はポートアイランドや六甲アイランドなど海上の埋め立て、開発ばかりに気を取られ、足元の防災対策が手薄だったのではないかと。私もつい去年まで関西経済連合会の副会長として再開発プロジェクトを推進してきた立場だから反省をしなければならぬ。都市鉄道の運行スピードも見直さなければいけないかもしれない。もしこうした大地震が日中に起こっていたら、崩れた高架に列車が高速で突っ込んだかもしれない。そうなったときの被害を考えるとぞっとします。

○宝塚市 会社員 稲井佐知子さん (27)

ダンスでも本棚でも立ってるもんは皆、こけました。もう、それでぐちゃぐちゃ。築 20 年のマンションに、親子 3 人、別々の部屋で寝てたんですが、母 (60) は腰の上を和ダンスが直撃。三段重ねの和ダンスが順繰りに落ちてくる。背中骨にひびが入り、内臓もすこしやられてしまったようです。

私の場合、ベッドの角にダンスが倒れて止まったし、父も三方を家具に囲まれた形で寝てましたが、布団の横に高さ 50cm ほどのストープがあり、この上にまずダンスが落ちたために隙間ができた。で、二人ともベチャッといかんと済みました。

揺れが収まって三人ともダンスの中から這い出した方がいいが、今度は真っ暗で、懐中電灯を探そうにも、みんな倒れて何か何やら。「こんなんですよ居ったな。私らどこにいたんや」と言い合ったぐらいグッチャグッチャ。電灯どころか貴重品も家の鍵も、どこにあるかわからへん。マッチ擦ったりしてどうにかお金と電灯をみつけ、軍手にスリッパで一部屋、片づけてやっと身動きがとれるようになった。

母は何かあってもすぐには動けない状態。付近一帯のガス漏れも激しかったので、その日の晩、毛布二枚持って学校に避難しました。でも体育館は寒くて寝るどころではない。余震もひどい。寒さと恐怖で硬直してしまい、その一晩で全身筋肉痛になりました。結局、こんなんではおられへん、と朝六時に避難所から「避難」して家に帰りました。

その日に電話が通じて、大阪の親戚の家に身を寄せさせてもらうことになったのです。西宮北口駅まで、徒歩で一時間かけて行きましたが、この時の移動と前日の避難が母のけがを悪化させたことが、後で分かりました。もうダンスと向かいあって寝るのはイヤですね。寝るとこは寝るとこ、モノ置くとこは置くとこ、これですわ。

○神戸市中央区 タクシー運転手 空中弥さん (57)

地震が起きたとき、営業所のガレージに帰る途中で、信号待ちしておったんですわ。ゴーッという音がして、風がブワーッというて上がってなあ。おかしいなって思うてたら、いきなりドドドンときた。

電気や信号がパツと消えて、あたりが真っ暗になった。何も見えん。下から突き上げられるのと、横揺れが激しくて、ハンドルをギュッと引き寄せて握って、ブレーキもがちり踏んだんやが、ドッドドッと揺れる。道が曲がるんやないかと思うたわ。まるで、ふるいにかけてられた石ころになった気分やったな。

道路の下を鉄道が走ってるんで、電車が道を突き破って飛び出してくるんやないかと思うた。後で聞いたら、四十秒ぐらいの揺れだったそうやけど、ながーく感じたなあ。これでこの世の見納めか、と思うたもんなあ。白い砂ぼこりが上がったのと、あたりが真っ暗だったのとで、ビルや電柱の様子は見えなかった。けど、あくる日に同じ場所を通ったら、えらいことになってたなあ。ビルは傾くわ、跡形もない建物もあった。

揺れが収まってからも、怖くて、よう走らんかった。随分たってから、はよ帰らな思うて、必死になって運転した。そのことだけ考えてたから、地割れとかなんて、見えへんよ。ヘッドライトつけても、ほこりがすごくて、どうもならんかった。

営業所にたどりついたのが六時過ぎ。そのころにはもう、あちこちで炎が上がっておった。家に帰る途中で、あちこちに転倒している車がおった。地震の時に走っていた車なん

やろうなあ。後から考えて、わしの車は、偶然信号待ちだったからよかったんやなあ。走っておいたら、おそらくひっくり返って、今ごろこの世にはおらなんだと思うよ。

○神戸市中央区 中華料理店経営 乗正房万里子さん (40)

揺れている間、布団の上でうずくまって「やめて一、もうやめて一」と叫んでました。あんなこわい思い、初めて。夫と二人、手探りで服を着て、表に出たら、同じマンションの人に大会いました。

欲しかったのは正しい情報。ラジオもない。西の空は真っ赤に燃えているの見える。皆、あちこち歩き回って、どこの壁が崩れてたとか、伝えあって、不安になるばかり。明るくなって、住人の一人がラジオを持って出ているのに気づき、やっと何か起きたかわかりました。

店を見に行きました。ぴったりくっついていたふたつのビルに二十センチほどの隙間が開いている。無事だった卵、野菜、米、調味料を持ちだしました。でもガスがないから、料理できない。避難所でも、ガスコンロを持っている人はいるので、救援物資に家庭用のガスボンベがあればいいなと思います。

避難所の食事は最初の日がお握り一個。こどもさんにあげてしまった。二日目がお握りと乾パン。私は、店のお金とか大事なものを入れたハンドバッグを枕元に置いて寝ていたのですが、タンスの下敷きになって、何にもならなかった。

家具はなるべく背が低くて、横長がいい、というのがあの地震で学んだ教訓です。下に重い物を入れて、安定をよくすること。それからもし、倒れてきても自分の力で押し返せるくらいの軽量、コンパクトなものに限ります。

背の高い、上等の家具は、地震国日本では、やめといた方がいい。靴下はいて寝るのも、これから私たちの習慣になるでしょうね。不便なことも多いですけど、熊本あたりからの救援物資の車が街を走っていたり。「三田から、お水を汲んできました」と差し入れを持ってきてくれる人があったり、人間を見直すような経験もしています。

○神戸市西区 神戸市役所広報課長 桜井誠一さん (45)

世界中からメディアが集まって、その対応が大変。この五日間で、トータル七時間しか寝てません。突然グラグラ揺れる衝撃を感じて、変な夢を見ているなあと思ったんですが、本当に地震だった。子供と妻をたたき起こして、外に出てみたが、それほどの被害はなかった。電気は止まっていたものの、水は出ましたからね。大丈夫かなとは思ったが、一応、災害の担当セクションの者に電話したところ、奥さんが、「もう出ました」という。着替えを一セットだけ持って、あわてて私も飛び出しましたよ。

電車が動いていないので、車で出ました。すでに渋滞していたので、回り道をした。その道はトンネルだらけ。遠くで火事の煙も見える。「もう一回、地震がきたら、おれは危ないな」と思ったが、仕方がないので突っ込みました。道はグニャグニャ曲がっているし、建物は燃え、市庁舎も崩れていました。すぐに庁舎で使えるところを探し、そこに机や電話機を集めて対策本部にしました。職員に招集をかけたが、なかなか電話が繋がらなかった。

実は去年、名古屋空港で飛行機事故があったのを機に、神戸でもし大事故が起きたとき

の広報態勢を、内々で研究していた。記者を招いて、勉強会をもったりもしていました。市民を安全に導くためには、的確な情報を早くメディアに流すことに尽きる。そのためには、新しい情報を紙に書き出し、どんどん追加して張り出す壁張り方式がもっとも適している、ということになっていました。

教訓があるとすれば、市の職員は。「やれることをやれ」ということですね。交通が遮断されて市庁舎に来られなければ、近くの区役所でも出張所でもいい。自分ができるところで活動するということです。

○神戸市須磨区 京大経済学部教授 本山美彦さん (52)

自宅に一万冊くらいある蔵書が、布団の上から雨あられと降ってきた。本棚は壁に釘づけしてあったのだが、激しい縦揺れのためクギ抜きで抜くように外れてしまった。ラジオでは京都や奈良で棚から物が落ちた、程度のニュースしかやっていない。そのわりに真っ黒な煙が空を覆い、灰が降ってくる。重大なことが起こっている、と判断して徒歩二十分ほどの須磨寺商店街にある妻の実家を見に行くと、家屋が崩れ、火炎が飛び交っている。凄惨な状態に足がすくんだ。通常なら車で三十分ほどの灘区の私の実家へは、二時間かかった。壊れた家屋を踏み越えていくうちに足が震え、胸の中で「お母さん」と叫んでいた。母と弟家族の無事が分かったときには、安堵のあまり座り込んでしまった。

こんな状態なのに、ラジオは「転んでけがをした」とか悠長な報道を繰り返すのみ。大阪からの情報ばかりで、肝心の神戸からの発信がまったくない。この凄惨な状態に気づかないのか、と叩き壊したくなるほど腹が立った。

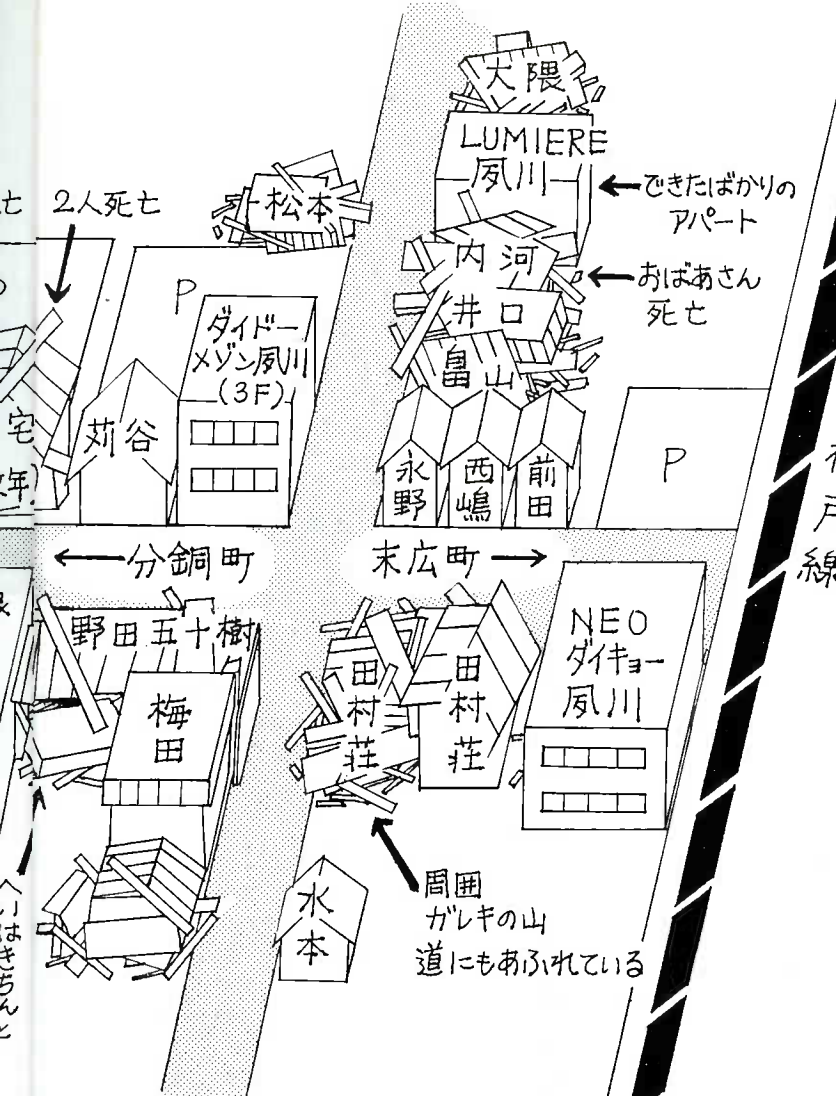
被災地の自治体は、まず地元住民への情報の発信に全力をあげるべきなのに、地震後六日たっても安全な場所への誘導もない。どこへ行けば水が手に入るのかの指示さえ、三日たっても住民には届かなかった。神戸市は「消費者行政」を誇っていたのに、官制の住民組織には現場に根ざした足腰がなく、ほとんど機能しなかった。自治会の掲示板に指示が張り出されなかった。

国際援助問題が私の専門のひとつ。やはりこんな時にカネだけ送ってもらっても仕方がない。必要なのは目の前の火事を消す人手だ。涙が出るほど頼もしかったのは、スイスから来た救助犬だ。また、信条とは相いれないのだが、自衛隊の姿を見た時はみんな本当にほっとした。役人は避難所に背広姿で大名行列のようにやって来るのだから、何とかならんのかと思った。

密着 西宮市分銅町 1・26 柱に深く食い込む恨みの爪痕

西宮市分銅町は、阪神西宮駅から歩いて十分ほどの住宅地だ。古くからの住民が多く、落ちついたたたずまいを見せていた。その古い住宅地を、阪神大震災が容赦なく襲った。地震発生から十日目の分銅町を、南から北へ歩いた。

阪急神戸線



分銅町は、ガレキの山になっていた。築十年以上の住居は、ほとんどが倒壊している。道にもガレキがあふれ、かつて建物があった場所は、壊れすぎて何があったのか分からない。昼なのに、人影もない。ガスと水道が、まだ復旧していないのだ。どうにか倒壊を免れている一軒

家に、置き去りにされた犬がうずくまっていた。飼い主が運んでいるらしいエサは、食べた様子もなかった。

左手に、築三十数年を経ている木造アパートの通称文化住宅が、見る影もなく崩れている。住人の一人、四十代の主婦の橋本さんは、言った。

「わたしは東側の一階に寝ていたけど、二階が西側に崩れたおかげで、天井がポツカリ開いて、助かったんですよ。それでも娘は腰を打って、ガレキに埋もれてしまいました。二時間後に救助されたけど、西宮の病院では診てもらえないんです。神戸の病院まで行ったんですよ。骨盤にヒビが入っていて、いまでも身動きできません」

橋本さんは、怒っていた。「あの時、病院は、大げさに苦しいと言わないと、とても診察してもらえないような状態だったんです。ここに自衛隊が到着したのも、午後三時です。一人でも多くの人を、助けてもらいたかった。それが一番、悲しいし、くやしい」

文化住宅では、西側にいた二十一歳の笹倉淳也さんが、同じような造りの北隣の住宅でも宮地春子さん(54)が、亡くなった。宮地さんの中学生の息子さんも

危篤だそうだ。

橋本さん宅の手前、南隣にも、二階建てのアパートがあった。一階部分が完全につぶれた。道路から二階の室内を見ることができない。

「ここは地震の時、一階に入っている五軒のうち二軒が留守だったから、死者が三人ですんだけど……」(橋本さん)

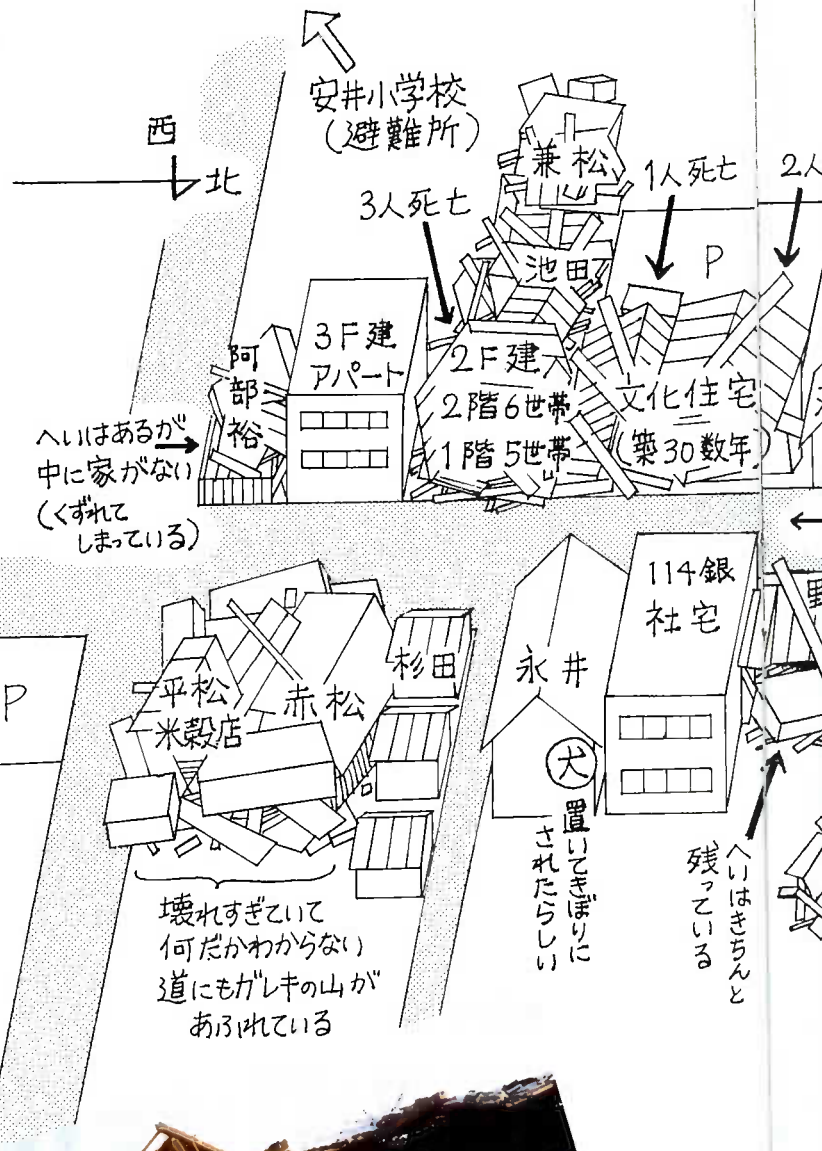
亡くなった林正夫さん(64) 淑恵さん(60) 夫婦や、アパートに住む女の友達の一部屋に遊びにきていた男性(友達は足をやられたが無事)は全員一階にいた。

文化住宅からさらに北へ歩くと、道路にぶつかる。道路の向こう側は、末広町だ。道路を左に曲がると末広町側に、一戸建ての住宅が二軒、境も分からないほど完全に崩れていた。

その崩れた家を見ながら、四十代の主婦、井口さんが、「地震の直後は、こんなに崩れてなかったんですけどね」

井口さん宅は、子供が留守にしていたこともあって、全員が無事だった。

「わたしは二階で眠っていたんですよ。逃げようと思ったら、階段がふさがって、ベランダから屋根を伝って逃げました。怖いも何もありませんでしたよ。だ



けどお隣の内河さんは一階で寝ていたおばあさんが、亡くなって。この近所で亡くなった方は、一階で寝ていた方が、多いのんとちゃいますか」

今回の地震ではたしかに、一階で寝ていて倒壊した家屋の下敷きとなり、亡くなったケースが多いようだ。西宮では火事はなかったが、神戸では下敷きとなった妻が目前で焼死して、ショックのあまり妻の名前を思い出せない男性もいた。ガレキの中から、胸の上に倒れている柱に爪が深く食い込んだ遺体が発見されることもあった。

内河さん宅の向かいにある松本さん宅も倒壊して、憲二さん(59)が、亡くなっている。

が、避難所では、被災者たちが復旧に向けて、活発な動きを見せていた。分銅町周辺の住民、七百人あまりが避難しているのは安井小学校だ。市内の被災状況や、交通機関の情報などが書かれた広報紙が配られている。食事も皆で調理して温かいものを食べている。この日のメニューは、昼がハヤシライス、夜は豚汁とうどんだった。

「いつまでもこうしてられないし、これからどうしたらええかも分からん」という、お年寄りの声も聞こえる。

それでも、この日、仮設住宅の申し込みが始まった。

いよいよ避難所の隅に行って、この原稿を書き始めることにする。

すると、ある被災者の方が、こう言ったのだ。

「お勉強するなら、こっちの暖かい所でしなさいよ」

宮下奈津子

日本のボランティア 新時代

一つの外来語のカタカナが、阪神大震災を報じる活字や電波の中に必ず登場している。ボランティアだ。

震災の惨状が報道されると、ボランティアが続々と馳せ参じた。行政の縦糸に横糸を通すボランティアの存在は、目をみはらせるものがある。

特捜検事からボランティアに身を投じ、さわやか福祉推進センター所長、福祉システムコーディネーターの肩書をもつ堀田力弁護士はいう。

「人を見捨てておけず、助け合う遺伝子を日本人も持っていたんですね。将来に向かつて頼もしさを感じます」

が、助け合う遺伝子たちを受け入れる体制は被災地の自治体にはなく、対応は手間取った。被害の最もひどかった、つまりボランティアを切実に必要とする地域の神戸市・長田区、東灘区などでも、被災から数日かかって、ようやく受付窓口ができる状態だった。

また、行政側は被災状況が的確につかめず、被災地の市役所、区役所へのボランティア志願者からの電話に、「間に合っています」

と断ったところもある。阪神大震災は、防災だけでなくボランティアについての貴重かつ具体的な教訓が提示されている。

西宮市のボランティアが結成した「西宮ボランティアネットワーク」のリーダー格の西野知之さんはいう。

「世界に例をみない被災で、今までのボ

ボランティアは 何をしたか、何をすべきか

ランティアの定説がくつがえるかもしれないと思う経験をしています」

堀田力弁護士も、

「阪神大震災は、ボランティアを急激に進歩させています。これは、今後のボランティアの発展につながりますね。ボランティアのリーダーが、めざましい成長をしています」

大活躍した 各種ボランティア

欧米と比べ、日本は、ボランティア後進国だといわれてきたが、阪神大震災では、種々さまざまなボランティアが活躍している。まず、被災者自身によるボランティアがある。

倒壊した家屋の前で、

「お婆ちゃんが埋まってる。助けて！」

と泣き叫ぶ声に、スコップ片手に隣人の若者が駆けつけ、ガレキを夢中で掘る。この若者もボランティアだ。

避難所で寝起きする被災者の間に自然発生的に自治組織ができ、その代表を務める男性は言う。

「ボランティアで引き受けたんです」

大人だけでなく、地元の小学校に避難している小学生もジュニア・ボランティア隊をつくった。避難所に必要な情報を載せた「避難所新聞」を学校の輪転機を活用して発行している。

全国各地から集まったボランティアは、自治体に登録されているだけでも、神戸市は約一万人、西宮市は約五千人にのぼる。

登録しないゲリラ型ボランティアは数知れない。

たとえば、被災者に食べてもらおうとたこ焼き屋、焼きイモ屋が屋台を引いてやってきた。もちろんタダだが、無料配布という年味気なすぎる。ボランティアである。

同じく職業でボランティアをしたのは、医師、看護師をはじめ、理容師が避難所を訪れての散髪ボランティアや、法律相談に乗る弁護士、家屋の被災度をチェックする建築士、心理療法師の心のケア、兵庫県獣医師会「兵庫県南部地震・動物救援本部」によるペットの飼育ボランティアなどなど。文書修復技師のボランティアグループは、倒壊した寺社や家屋の下の文化財、古文書などの文化遺産を掘り出し、修復につとめている。

市民運動で培ったネットワークが今回のボランティアで生きたケースも多い。「アウトドア義援隊」は「長良川河口堰建設に反対する会」が、この運動で協力関係にあるアウトドア業界とともに結成したもので、寝袋、テント、コンロなどの救援物資を調達し、配布している。

長田区の炊き出しや給水車、移動風呂などの生活必需品を載せている日刊紙『デイリーニーズ』を発行しているのは、市民団体の「ピースボート」だ。「日本児童家庭文化協会」と「マザリリング研究所」は、被災した乳児と母親のホームステイを同研究所の母親グループが受け入れ、食費などは同協会が援助する。アカデミズムでも、東大の生産技術研



東灘区の東山第三小の避難所で

究所が被災現場の研究者を支援するボランティアを組織し、他大学や自治体への情報を電話、ファクス、インターネットで提供し、外国の調査団に対応する。ルワンダ難民キャンプなどでの医療活動経験のあるAMDAをはじめ、経験を積んだNGOの組織力、機動力には目ざましいものがある。

世界の地震被災地に駆けつけてきた英国の「インターナショナル・レスキュー・コア」が搜索機材、医薬品、テント、食糧などを携えて神戸に到着した時、天理教のボランティアグループが、トラックとマイクロバスを用意して出迎えた。

環境NGO「リスボンス協会」は、灘区の公園にテントを張り、市民運動の有機農産物の宅配グループと連携して、一日七千食の食糧を調達し、焚き出ししている。

「難民を助ける会」の国内組織「さぼうと21」は、「じゃがいもの会」とともに、

韓国から十万人分の下着を緊急輸入した。また釜飯隊、豚汁隊などを組んで炊き出しを行っている。

ライフラインの復旧、倒壊建物の撤去から都市として復興するまでに二年といわれ、ボランティアも長期戦となる。

こんな例もある。松本市の炊き出しボランティアは、一組三泊四日を期限としてローテーションを組んでいる。

また「曹洞宗国際ボランティア会」の現地対策本部では、向こう二カ月の活動体制を整え、三百五十人の登録済みボランティアが待機している。

安全と健康への自己防衛

救援の長期化によって、ボランティアの活動は多様化している。神戸市企画調 整局総合計画課で、救援ボランティア受

付の竹部元造さんはいう。

「当初は水と食糧が必要とされましたが、今は生活が始まり、雑多な要求が出ていますので、ボランティアの需要は尽きません。NGOの組織力や機動力、経験は大変ありがたく、感謝しています。組織に属さない個人やボランティア初心者は一歩ヒューマンな避難所に入っていただけとありがたいですね」

「西宮ボランティアネットワーク」の西野さんは、長期化に向けて、

「今後は復旧、復興作業に入るので、常駐できるボランティアが求められています。ボランティアの疲労も濃いので、交代要員の確保と、ボランティアのケアも必要です。特に看護婦さんが不足していて休みなしの状態なので、ぜひ交代要員がほしいですね」

避難、救援の長期化に伴い、各避難所の被災者とボランティアにはリーダーが生まれ、ルールができています。現地にビタミン剤を持参しつつ、高齢者のホーム



兵庫区の柳原交差点で

ステイの受け入れルートをつけにいった堀田弁護士は、こんな経験をした。

ある避難所では、リーダーが避難している人数分のビタミン剤がなければ受け取れないといった。不公平感が出てしまいうからだという。別の避難所のリーダーは数に構わず受け取った。

「団体生活は特殊な問題があり、公平感は大変な問題だと思えますね。避難所によってそれぞれのルールを持っているので、ボランティアは勝手にせずにリーダーの指示に従うべきですね」

自治組織がしっかりできているある避難所では、勝手に親切の押し売りをするボランティアに來られ、受け入れを辞退する一幕もあった。

被災者の立場に立てば、好ましいボランティアと、ありがた迷惑なボランティアがある。神戸市の地方自治体の救援ボランティア受付け係にそのあたりを聞くと、「ボランティアは尊いものですから、質をいうのは口はばったいよう……」



と口を濁す。ボランティアの志望動機が純なものだけに、受け入れ側にはボランティアについてうんぬんすることをためらうものがあるが、ボランティア初心者は、装備やマナーにどうしても未熟さがある。

「なにをするか与えられるのを待つのでなく、自分で切り開いていただきたいですね。まず半日は、被災地域を見て歩いて、どんなことが必要とされているか考えてからボランティアに参加されることを勧めます」(竹部さん)

神戸市役所に申し込みをしてくるボランティアには事前に、交通費は自費、宿

泊は責任をもつが、公共施設に泊まるので寝袋を持参、食事は現場で対応するが、安全と健康のための薬を持参するなどの自己防衛はしてほしいと説明する。

ボランティアの中にはケガ人も出ている。神戸市では、ボランティアの二次災害に保険を用意した。西宮市では、「宿泊用の毛布はありますが、寒いですから寝袋は持参したほうが無難です。軍手、マスクも持ってきたほうがいいですね。逆にゴミは持ち帰ってください。炊き出しなどのゴミは、市町村に持って帰ってもらわないと。ゴミは大変な問題なんです」(西野さん)

ボランティア支援法への提案

西野さんは、復興に向かうこれからは建築、土木、法律などの専門家のボランティアが必要だと言う。仕事を失った人の職の斡旋も、避難所でできるようにすれば、とも言う。

約一万人のボランティアが登録している神戸市は、専門分野の建築、土木職の登録が四百人、医療職の登録が二百人。一万人の約八割は「その他なんでも」という分類に入るボランティアだ。

堀田弁護士は、救援の長期化はボランティア支援のシステムが必要だと言う。

「まず組織とそれを動かす常駐のリーダーが必要で、有給にしなければ。寒さと疲労で二週間が限度なので、リーダーを含めた数チームで二週間ごとに交代する。

組織を置く場所と電話等の設備とその経費も必要です」

企業のボランティア休暇や、大学が学生のボランティア活動を単位に認定する支援策が登場した。政府のボランティア支援法制化は遅れているが、堀田弁護士のボランティア支援法に対する提案は、「ボランティアの法人化、寄付の税控除、行政は口を出さずボランティアの自主性に任せる、この三つに尽きます」

で、阪神大震災のボランティアの存在は、この三つの提案の妥協性を裏付けている。ボランティアの代表格「国境なき医師団」(本部・フランス)は医療資材、通信機材から衣食住を自給自足する体制を持つ。ここまで日本のNGOがたどり着くのは、いつの日か。 嶋村 久子

別紙 5

資料：神戸新聞社：阪神大震災 全記録、1995年3月30日

「避難所ケアの西宮モデルを」社説（1995年1月31日）

「行政も含めてみんな一生懸命やっている。お互いどうかみ合うか。スタンスの取り方が問題です」大世帯の被災住民の避難所になっている西宮市立中央体育館で、NGO（非政府組織）のボランティア活動の采配を振るっている愛知国際病院副院長の佐藤光さんはこう語る。

NGOの活動はこれまで国外援助が主だった。日本での大規模な支援活動は初めてだ。いろんなボランティアグループがあるが、真っ先にやってきた。「医療ベースキャンプを張ったみたい。十年、二十年後に振り返って、あのとき西宮スタイルが確立したんだな、という活動がしたい」と佐藤さんらは意気込む。

西宮市内に二百あった避難所は百七十に減ってきたとはいえ、その状況は千差万別、同じ避難所でも日ごとに変化が著しい。医療面でいえば、救急医療、応急措置が一段落して、地震発生以来、半月たった今、住問題解決の困難さからくる避難所生活の長期化で、被災者の精神的、心理的ケアをどうするかが問われる。

NGOもそのための班を編成し、兵庫県西宮保健所には精神科救護所ができた。近畿保健所長会の連携で京都府からも応援に駆け付けている。

しかし将来の「不安」もさることながら、「なぜ自分たちだけがひどい目に遭わなければならないのか」という「怒り」や、「行政の対応はなっていない」という「不満」にどう対処していくか。

北岡西宮保健所長は「保健所の仕事は遺体をどうするかから始まった。それは文明の問題であり、職員をくたくたになるまで督励した」と言い、地元の医療機関も夢中でやったと代弁する。

そして近畿府県の支援も得て医師、保健婦、看護婦からなるチームを編成、避難所を担当していったという。その際、西宮市保健環境部が、避難所の割り当てを、やみくもにやらず、避難所の管理人である学校長らとよく相談して決めたことに称賛の言葉を惜しまない。実情に通じている管理人の精神衛生へのおもんばかりを、精神科医の立場から高く評価している。

同市保健環境部は先週、NGO関西医療部会、自治医科大、関西労災病院、兵庫医科大、福山医師会などと地元医療機関との打ち合わせ会を開いてボランティアの受け入れなど、必要な調整課題を話し合った。

地元の兵庫医科大は、救急医療をひとまず終わると、避難所の常駐と巡回を始めた。全市の避難所をもれなくカバーする役割を果たしてきたが、地元医療機関の再開やボランティア活動の推移を見ながら、撤収を考えはしめた。震災でマヒした大学病院の機能正常化を目指すものだが、それによる避難住民の不安をどう打ち消していくか。自治体主導の「西宮モデル」の真骨頂が問われるのはこれからだ。

別紙 6

大震災の教訓と対応策（当時）、並びに評価と改善策（現時点）

【平時】

（住宅の耐震化の促進）

- 阪神大震災では地震直後に亡くなった「直接死」のうち、神戸市内では倒壊した住宅や家具の下敷きになった人が 8 割超えを占めた。さらに約 1 割は壊れた住宅から逃げ出せず焼死した。大部分の人が住宅で犠牲になった。（文献 35）
- 全壊した家から「出られない。助けてくれ」という男性の叫び声が聞こえたが、屋内のどこかはわからない。その近くで、女性が「家が傾いて子供が閉じこめられた」と泣きながら助けを求めてきた。火が迫る中、ほかに救助が必要な現場も多数あり、時間との勝負だが、全壊した住宅では簡単にはいかない。地震で消火栓の配管が破損して水が出ず、炎は拡大していった。東京や大阪には古い木造住宅の密集地帯が多い。大地震があったら神戸と同じになる。いつも生活している部屋や寝室だけでも耐震化してほしい。（文献 34）
- 熊本地震でも、耐震化していない住宅は損壊することが裏付けられた。住宅の耐震工事費は平均 150 万～200 万円で、多くの自治体がすでに補助制度を設けている。個人財産である住宅の補強にさらに公費を投入することには抵抗があるかもしれないが、災害が起きた後のことを考えてほしい。仮設住宅の提供、復興公営住宅の建設、被災者生活再建支援金の給付などで 1 世帯当たり 2000 万円以上が使われる。街の復興にも膨大な資金がかかる。それを考えれば、耐震補強に事前投資して被害軽減を図るのが得策ではないか。自治体職員や建築の専門家は、耐震化に消極的な世帯をローラ作戦で回って決断へ導いてほしい。耐震化の義務化は難しいが、古い住宅をリフォームする際に義務付けたらどうだろう。全面改築でなくても部屋に耐震シェルターを設けるだけでも違う。（文献 35）
- 耐震化、家具の固定は重要です。阪神大震災では家具転倒で多くの方が亡くなりました。家具を固定してくださいと行政が呼びかけ補助金を出しても、高齢者には家具固定作業そのものが負担になります。実施促進のためには若い人の協力を得て希望者に家具固定をして回りました。（文献 29）

（防災教育、防災意識の向上）

- 市民防災の準備として、自分の家族、近隣、家屋、宅地、交通路の地震環境を知り、地震のリスクを住民に知らせることが重要。罹災証明はその後の生活復興を左右すること、義援金、支援、援助などについても広報しておくのがよい。（文献 19）、
- 地震時に支援物資が届かない場合に備えて非常食を用意すること。家屋倒壊時の避難生活先（避難所、マイカー、知人宅、会社寮）を事前検討しておく。（文献 19）
- 持病のある人は、病院、治療、薬の用意。障害者、高齢者、幼児は、避難の方法と心のケアを。（文献 19）
- 大震災を通じ、倒壊する恐れのある危険な建築物と、多少崩れはしても、人命に危害を及ぼす可能性の低い建築物を区別する方法を学ぶことができればよい。（文献 18）
- 地域防災の担い手を要請しようと兵庫県が始めた防災リーダーの養成講座の修了者が 1800 人以上となり、防災士として活躍したり、地域で防災イベントを実施したりするようになってきている。（文献 22）
- これまでの巨大地震の際に見られるケースだが、津波警報がいち早く正確に伝達されても、住民が避難の準備すらしなかったという話をよく耳にする。「大津波や大型台風

がやって来る」「大きな災害が起きる恐れがある」と再三にわたり警告されても、人々は「自分だけは大丈夫」と考えがちである。専門学者は、こうした心理を「正常化の偏見」と呼ぶが、情報に応じて住民がいち早く的確な行動をとらなければ、情報を伝達した意味はない。住民が「正常化の偏見」に陥らないようにするには、災害を実際に経験することだが、災害は都合良く小規模で終わってはくれないから始末が悪い。住民が災害情報に対して適正に反応するためには、日頃の防災教育などを通じて、災害に対してそれぞれの地域がどういった危険性を抱えているのかを周知徹底させ、全ての災害を「対岸の火事」とはしない眼を養うことが必要である。その上で、行政側やマスコミ側は、災害情報は、広範囲の地域を対象として「マクロ情報」だけでなく、地域住民が災害をごく身近なものとして感じるように「ミクロ情報」を積極的に流す努力が必要である。(文献 17)

- 震災を知らない世代は確実に増えている。震災を経験した神戸市職員の割合は 48%と半数を割り込んだ。教訓をどう継承していくかは大きな課題の一つだ。(文献 30)

(緊急対応の訓練)

- 市民の一人一人が災害とは何かについて明確なイメージを持つようにする必要がある。そのためには訓練のあり方は非常に重要な課題である。(文献 16)
- 司令塔となる自治体は思考停止に陥らないためにも、小区員を被災地に派遣するなどして十分な経験を積ませ、十分な災害対応のイメージを養うことが重要。(文献 20)
- 事前の準備がなければ、最初の 3 日間に活動することはできない。(文献 16)
- 単一の災害だけを想定した準備から、起こりうる事態ならばどれにでも対応可能な危機管理的発想に立った準備が必要である。(文献 16)
- 災害対応に関わる人がすべて必要な知識を持って始めて、調整が可能になる。(文献 16)
- 災害訓練として、実地訓練に加えて図上訓練も活用すべきである。(文献 16)
- 巨大災害のプロは一人もいない。(文献 16)
- 災害対応において一番大きな力を発揮できるのは被災者自身である。(文献 16)

(被災を想定した行政システムの整備)

- 想定外災害への対応として、連鎖・膨大余震の緊急・支援対応が必要。救援物資不足、支援物資配布ルート of 事前計画。(文献 19)
- 災害時に自治体が住民一人一人の被災状況を集約し公的支援に役立てる「被災者台帳」の作成に、阪神大震災を契機に兵庫県西宮市が開発したコンピューターソフト「被災者支援システム」が一役買っている。2014 年までに 109 自治体が導入し「迅速な支援につながる」と好評だ。(文献 25)
- 阪神大震災の経験により災害時の重層的な支援網が形作られたのは、大きな前進だ。課題は、多方面から寄せられる支援を、災害現場で生かし切ることだ。被災自治体の受け入れ態勢が整わないために、応援要員に的確な指示を出せず、混乱を招く事態が繰り返されている。救援物資が途中で滞留して、避難所に行き届かなかつたり、ボランティアがせっかくの支援を断られたりする。こうした事例が、2011 年の東日本大震災や今年の熊本地震などで見られた支援と表裏一体である「受援」の観点で、災害対応を再点検すべきではないだろうか。(文献 31)
- 兵庫県が、災害時に自力で避難するのが難しい高齢者や障害者らの個人情報をもとめた「避難行動要支援者名簿」を、自治会など自主防災組織に事前に提供することを促すための改正条例案を 2 月県議会に提案することが 16 日分かった。自主防災組織が早めに個別の避難計画を作成できるようにするのが狙い。県によると、都道府県で初という。(文献 28)

- 熊本地震では避難対策の改善が指摘された。高齢者などの避難が困難な方の対策をどうするか。医療や介護などケアを受けられる「福祉避難所」の設置も課題です。地震がおこってからの対応は無理なので、事前に自治会などのコミュニティレベルで避難が困難な方を把握しどう避難させるかという住民ごとの「個別支援計画」の用意が必要です。(文献 29)

(インフラ設備の耐震化)

- 行政業務の緊急対応のために、庁舎の耐震・耐津波・耐断層診断と補強を行っておく。支援業務停止時のバックアップ作成をしておく。(文献 19)
- 熊本地震では司令塔となるべき自治体庁舎の耐震化の遅れが浮き彫りになった。(文献 20)
- 阪神大震災では病院の建物が壊れ、医師が手当よりもがれきの処理に追われることもあった。災害時こそ救命活動に専念できるようにすべき。ところが、熊本地震では、被災した病院の閉鎖が相次ぎ耐震化の遅れが浮き彫りになった。(文献 21)

(最新技術の活用)

- 衛星利用のシステム 例えば情報伝達の手段として、神戸市の場合なら区と区の間で連絡をとるのに無線がいいのか、衛星を利用したシステムがいいのか。災害が起きた場合、いち早く情報を収集することができなければ、救援物資などの資源をどこへ投入すればいいのか、正しい決断を行うことができない。カリフォルニア州では、たび重なる過去の反省から、災害時には情報伝達に支障が出るだろう、と予測して、衛星による系統的なコミュニケーションのシステムを考えた。(文献 18)
- 人工知能(AI)やあらゆるモノをインターネットでつなぐIoTを、防災や減災、復旧作業の迅速化に活用する動きが始まっている。国立研究開発法人「情報通信研究機構(NICT)」は、災害時に被災者が発信するツイートの書き込みを基に、被災状況や必要な物資などの情報を「見える化」するシステムの開発を続けている。大手製薬MSD(東京)などは、無人機ドローンを使った医薬品配送の実用化を目指し、国家戦略特区(福岡市)での飛行試験を進めている。(文献 33)
- 阪神大震災の発生から22年。住宅メーカーや電力・ガス会社など都市基盤を支える企業は、商品や設備の耐震性を高める一方、被災地で集めたきめ細かな情報を社内で共有するシステムも充実させてきた。被災者支援、復旧作業を迅速に進めるためだ。こうした取り組みの一部は、昨年4月の熊本地震でも生かされたという。(文献 27)

【地震発生時】

(市民への正確な情報提供)

- 災害時に情報が大切であることはわかったが、それをどのように流通させるのか、質をどう保証するのかについては十分検討されていない。(文献 16)
- 災害に遭遇した人達が災害発生後どういう行動をとるべきか、その指針となるような情報こそが必要なのである。災害時に人々が本当に必要とする情報は、今どの病院が開いているか、どの道路が使えるか、電気やガス、水道は何時使えるようになるのか、鉄道はどの路線が動いているのかなど、被災後に人々が生存して行くのに必要な情報であろう。すなわち「安心情報」である。(文献 17)
- 行政サイドが住民に警戒を呼びかけた情報がかえって流言や避難騒動を招いてしまうことがある。住民への情報文のなかで、マグニチュードとか避難準備指示など、普段住民に馴染みが薄く、十分に理解されていないような専門的な言葉が使われたり、あるいは曖昧な表現が使われたりすると、情報が住民の間に伝わって行くうちに流言に変化して行くことを教えている。災害時の情報は、[正確さ]を期するために、住民にとって慣れていない言葉や曖昧な表現を避けるべきである。同時に、日頃の防災教育などを通じて、情報の送り手と受け手側の災害に対する知識のレベルをほぼ同じにしておくことも必要である。(文献 17)

(災害対応の組織の運営)

- 指揮と情報が大切である。(文献 16)
- 効果的な災害対策のためには意思決定できる立場の人の早期参集が重要である。(文献 16)
- 災害時に直近参集方式をとる組織は多いが、参集した人数と処理すべき仕事量がマッチするとは限らない。(文献 16)
- 被災地に送り込まれた担当者は1週間しゃにむになって働く、それをどう後方支援するかがその間の災害対策本部の責務である。(文献 16)
- 巨大災害となる危険性が高い都市災害では、広域連携の必要性も高い。(文献 16)
- 災害対策本部ができると、会議のための資料集め・資料のまとめが自己肥大化する危険性がある。(文献 16)
- 運用をはじめとするソフトな部分は予算化されにくく、ハード主体の整備が中心になり実効性があがらない。(文献 16)
- ハードな整備に比べて、運用面での整備が難しい。(文献 16)
- 全体像が見えないと、プロであればあるほど手慣れたことだけに任務を限定しがちで、大局的な判断を誤る危険性が高い。(文献 16)
- 被災地でのニーズの変化を的確にとらえて、本部に伝達することが重要である。しかし、難しい。(文献 16)
- 災害対策本部では被災地の支援よりも対社会的な対応が優先する危険性がある。(文献 16)
- マニュアルを整備しても、実践的でなくマニュアル倒れになることもある。(文献 16)
- 地元だけで対応ができないので、広域応援が必要となるが、その運用に多くの問題がある。(文献 16)
- 地元情報が無い時点で応援にこられても、適切な配置ができない危険性がある。現状ではどこかの地域を全面的に任せる棲み分け方式になることが多い。(文献 16)
- 被災地で働く災害対応者は疲労のため、2~3日すると甘いものを欲しがり、1週間すると温かいものを欲しがると。(文献 16)

(避難所の運営)

- 熊本地震では、避難所の集約の打診に対して猛反発があった。派遣される市職員は日替わりで、避難者との意思疎通が弱く、要望した物資が4、5日たって届くことがしばしばだった。(文献 20)
- 市内の全避難所を使う事態を想定していなかった。現場の職員は何をしたらよいかわからなかったと思う。(文献 20)
- トイレの確保は切実な問題であり、仮設トイレの調達と搬送に多くの努力が必要だった。(文献 16)
- 福祉避難所の開設 (文献 19)

(救命・救助活動)

- 命を助けるには、3日、3週間、3ヶ月という節目があり、決して一時的な問題ではない。3日目までは負傷、3週間は感染症、3ヶ月はストレス対策。(文献 16)
- 負傷者の手当の問題をもっと真剣に考える必要がある。(文献 16)
- 医師と消防の協力による緊急消防援助隊の試みの全国展開を促進していくことが大切である。(文献 16)
- 救護所をどこに設置すべきかは十分議論すべきである。設置されたことを皆が知ることができる場所である必要がある。(文献 16)
- 機能停止をした状態では、域外への搬送をもっと積極的に考える必要がある。(文献 16)
- 域外搬送を可能にするためには、情報と搬送手段が必要である。今回の災害ではそれが確保できなかった。(文献 16)
- 消防活動についてのほうが標準化が難しい。(文献 16)
- ヘリコプターの導入が緊急対策の要のようにになっているが、運用に関しては被災地内での地上基地の緊急の設定かできるかが重要な問題である。(文献 16)
- 命を助けるために被災地外から何万人もの応援がきたが、最初の3日間に来た者は少なかった。(文献 16)
- 医療機関もライフラインがなければ、ただの箱に過ぎない。(文献 16)
- 震災を契機として、救急の分野では全国的な標準化は進んでおり、全国的な広域応援の体制が整いつつある。(文献 16)

(自衛隊による救出活動)

- 自衛隊は決して万能でないことを留意するべきであり、自衛隊の能力を正しく理解して活用することが重要である。(文献 16)
- 自衛隊はそのほとんどが被災地外からの応援であり、原則として土地勘はないと考えるべきである。また、被災地以外からの応援のため、進出するまでにそれなりの時間を必要とする。さらに自己完結性が高いことは、その分の準備が大変であることにも留意する必要がある。(文献 16)
- 自衛隊が組織として作戦遂行のために持つ4参謀性は、災害対応組織のあり方や機能分担を考える上で多いに参考にすべきである。原則的にはカリフォルニア州が採用するSEMS同一であり、作戦遂行を担当する運用に加えて管理・調達・装置といった後方支援部門からなる。(文献 16)
- 自衛隊では活動第2日目から最低で4時間は休息をとれるような隊員のローテーションを行う。(文献 16)

(物資輸送)

- 異変が早くつかめると応援資源の配置がスムーズにできる。(文献 16)
- 災害対応には、資源問題と配分問題の 2 種類がある。供給系ライフラインを例にすると、上位施設である生産施設・幹線ライン系統に被害がでると資源問題、下位施設で配給・供給ラインに被害がでると配分問題。ライフラインの場合にはどれも配分問題。(文献 16)
- 災害対応のロジスティクスで、食事や寝具は誰でも気づくが、復旧業務に必要となる軽油・灯油・重油といった燃料の調達と配送にはなかなか気づきにくい。(文献 16)

【復旧・復興時】

(被災家屋、復興住宅)

- 熊本地震で被災した家屋の公費解体が大幅に遅れている。その遠因は阪神大震災を機に作られた解体ゴミの細かな分別ルール。自治体の柔軟な対応を望む住民は多い。
(文献 20)
- 阪神大震災を教訓に兵庫県が独自に作った「家屋被害認定士」制度が、昨年熊本地震を機に改めて注目されている。自治体による被災住宅の損害の判定が混乱して罹災証明書の発行が滞り、住民の生活再建の足かせになったためだ。専門知識を持つ職員を育成するため、兵庫県に研修を申し込む自治体が増えている。(文献 24)
- 被災者生活再建支援の対象は全壊か大規模補修の半壊だ。被害認定は市町村がするが、大規模半壊と半壊の線引きは難しい。(文献 31)
- 「被災家屋ランク付けと罹災証明の発行」 家屋診断士の不足 (文献 19)
- 兵庫県内では復興住宅を巡って震災直後の対応のつまづきが時間の経過とともに深刻さを増している。住宅には当時年配の住民から入居した。自治体側の配慮だったが、コミュニティが分断され、住民の高齢化や孤立から孤独死が続出した。(文献 20)
- 阪神大震災の被災者が暮らす借り上げ復興住宅を巡り、20年の返還期限を過ぎても入居し続ける一部住民に対し、自治体が明け渡しを求める訴訟が起きている。(文献 23)
- 復興住宅の高齢化率は兵庫県全体の倍近い高さだ。復興住宅での孤独死は過去10年で最多を記録しており、入居者が直面する環境の厳しさがうかがえる。(文献 30)
- 災害には自助と共助が不可欠だ。困っている人になにができるか、改めて考えたい。ボランティアや心的外傷に対する心のケアは阪神大震災で定着した。近年の災害でも効果を見せている。被災者をいたわる心を持ち続けよう。(文献 26)

(市の再生計画)

- 地元住民・企業、関係市町村、上位行政機関との合意を得て、事前に復興計画すべき。(文献 19)
- 神戸市長田地区では震災2か月後に復興計画を策定、再開発ビルに入居した。しかし、復興計画は地域の生活文化や住民の思いを十分に汲むものでなく、対応を急いだことが、かつての街のにぎわいを失う結果となった。建物の再建にとらわれずコミュニティの核となる商店街をつくることが大切。(文献 20)

以上

参考文献・資料

- 1) 気象庁 HP : http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/jishin/about_eq.html
- 2) 竹内 均編：巨大地震, ニュートン臨時増刊号, 教育社, 1995 年 3 月.
- 3) 気象庁 HP : <http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/kyoshin/kaisetsu/outou.htm>
- 4) 高田至郎・沖村 孝・李 騰雁：地震動と被害特性、土木学会誌、1995 年 6 月号
- 5) 日経 BP 社：土木が遭遇した阪神大震災、日経コンストラクション、1995 年 7 月
- 6) 毎日新聞社：平成 7 年兵庫県南部地震、サンデー毎日、1995 年 2 月 4 日
- 7) 阪神高速道路公団：震災から復旧まで 写真集、1997 年 1 月
- 8) 毎日新聞社：緊急報告 第 3 弾 阪神大震災の 30 日、サンデー毎日、1995 年 2 月 28 日
- 9) 神戸新聞社：阪神大震災 全記録、1995 年 3 月 30 日
- 10) 毎日新聞社：緊急分析 第 2 弾 阪神大震災、サンデー毎日、1995 年 2 月 18 日
- 11) 日経 BP 社：阪神大震災の教訓、日経アーキテクチュア、1995 年 3 月 30 日
- 12) 産経新聞社：神戸大震災、週刊 Gallop、1995 年 1 月 27 日
- 13) 神戸大学工学部：兵庫県南部地震 緊急被害調査報告書（第 2 報）、1995 年 3 月
- 14) 朝日新聞社：レンズが泣いた関西大震災写真記録、AERA、1995 年 2 月 25 日
- 15) 読売新聞社：続報 阪神大震災、週刊読売、1995 年 2 月 14 日
- 16) 土木学会・関西支部：大震災に学ぶ、第 II 巻、第 8 編、pp.191、阪神・淡路大震災調査研究会報告書、1998 年 6 月
- 17) 吉村秀實：災害時、情報はどうかあるべきか、pp.46、土木学会誌、1995 年 10 月
- 18) 朝日新聞社：関西大震災に学ぶ、米国からの提言 防災計画で被害を抑える、p 42、AERA、1995 年 2 月 5 日
- 19) 高田至郎：熊本地震から学ぶ地震防災、構造懇話会 新例会講演会 2017 年 1 月
- 20) 日経新聞：阪神大震災 22 年、教訓は生きたか(上) (下)、2017 年 1 月 10 日 & 11 日
- 21) 日経新聞：病院 進まぬ耐震強化、2017 年 1 月 12 日
- 22) 日経新聞：防災リーダ広がれ、2017 年 1 月 13 日
- 23) 日経新聞：復興住宅解けぬ対立、2017 年 1 月 14 日
- 24) 日経新聞：家屋被害認定 兵庫県に学べ、2017 年 1 月 15 日
- 25) 日経新聞：被災者義援金の支給・罹災証明の発行、西宮式住民支援に活躍、2017 年 1 月 16 日
- 26) 産経新聞：いたわる心持ち続けよう (社説)、2017 年 1 月 17 日
- 27) 産経新聞：被災地で集めたデータ 防災に生かす、2017 年 1 月 17 日
- 28) 産経新聞：要支援者の名簿 市町は事前提供を、2017 年 1 月 17 日
- 29) 産経新聞：その日への備えはできているか、2017 年 1 月 17 日
- 30) 毎日新聞：22 年の知恵、防災の礎、2017 年 1 月 17 日
- 31) 毎日新聞：住宅再建支援の充実を (社説)、2017 年 1 月 17 日
- 32) 読売新聞：自治体の受援力を高めたい (社説)、2017 年 1 月 17 日
- 33) 読売新聞：防災・減災に最新技術、2017 年 1 月 17 日
- 34) 読売新聞：倒れた家 消防士を阻んだ、2017 年 1 月 17 日
- 35) 読売新聞：耐震化補助は先行投資、2017 年 1 月 17 日